

スキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズムの発展構造

吉沢 直 * **

抄録

本研究では、日本のスキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズムの発展構造を検討するため、中国、台湾、香港からの訪問が卓越する新潟県湯沢町の事例の分析を行った。調査方法としては（1）ガーラ湯沢および苗場スキー場での中国系観光客 100 名に対する観光行動に関する聞き取り調査、（2）湯沢町観光協会および上述の 2 つのスキー場運営企業への聞き取り調査を行った。

湯沢町における彼らの観光行動は 2 か所のスキー場で異なっていた。ガーラ湯沢では優れたアクセスに基づく日帰り訪問が卓越し、初級者のためのスキーやスノーアクティビティが充実し、「短時間体験型」のインバウンド・スキー観光が形成されていた。一方、苗場では観光客の観光行動はスキー場とホテル内で完結する 3 泊程度の滞在が卓越し、「中期滞在型」のインバウンド・スキー観光が形成されていた。受け入れ体制の構築についても、2 か所のスキー場で差異がみられる。ガーラ湯沢ははじめてのスキー経験や雪体験のサービスが拡充しているが、苗場スキー場はある程度スキーができる観光客を集客する傾向にある。一方で共通点としては、スキー場運営主体が系列グループの優位性を生かしたインバウンド対策を行う点が指摘できる。

中国系観光客によるこの 2 つタイプのスキー観光形態は、豪人による日本のスキーリゾートでの「長期滞在型」のスキー観光形態とは大きく異なる。北海道のスキーリゾートの事例を含め、現在日本にはこの 3 タイプのインバウンド・スキー観光が存在していると考えられる。また、フランスをはじめとする欧米諸国のスキーリゾートに比べ、外国人スキーヤーを 2000 年以降に後発的に受け入れはじめた点が日本のスキーリゾートにおけるインバウンドの特徴といえよう。

キーワード：インバウンド・ツーリズム、スキーリゾート、観光客行動、新潟県湯沢町

* 筑波大学大学院 〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1 丁目 1-1

** Université Grenoble Alpes, Sciences et Techniques des Activités Physiques et Sportives (STAPS), Laboratoire Sport et Environnement Social (SENS), 1741 rue de la Piscine 38400 Saint-Martin-d'Hères.

The Developing Process of International tourism in Japanese Ski Resorts

Nao Yoshizawa* **

Abstract

This study examines the developmental process of international tourism in Japanese ski resorts and focused on Yuzawa where attracts tourists from China, Taiwan and Hongkong. Yuzawa is one of the most accessible ski destinations from Tokyo having direct transport connection by high-speed rail and highway. The developmental process of international tourism is analyzed by (1) Interviews for about 100 Chinese tourists at Gala Yuzawa and Naeba Ski Field and (2) Interviews for Yuzawa Tourism Office and two ski-lift companies.

Yuzawa attracts many beginner Chinese skiers as well as tourists who do not ski. There are two types of ski tourism by Chinese tourists in Yuzawa. At Gala Yuzawa, “Short-time experience type” is dominant by using high-speed train. Daytripper visit here for snow sightseeing within their Japan-travel. Another is “middle-days staying type”, in which intermediate level skiers tend to spend about three nights at the Hotel within Naeba Ski Field. Chinese tourists do not visit other tourism attractions in Yuzawa, they stay only in ski fields. This type of ski tourism by Chinese is completely different from that of Australian staying “Long-days staying type” in Japanese ski resorts.

Including the cases of ski resorts in Hokkaido, it appears that there are three types of International ski tourism in Japan. Moreover, another characteristic of international ski tourism in Japan is that it began accepting foreign skiers after 2000. Compared to ski resorts in Europe, it was happened later.

Key Words : Inbound Tourism, Ski resorts, Tourist Behavior, Nigata-Prefecture, Yuzawa-machi,

* Graduate School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba 1-1-1, Tennodai, Tsukuba-shi, Ibaraki, Japan 305-8577 Institution

** Université Grenoble Alpes, Sciences et Techniques des Activités Physiques et Sportives (STAPS), Laboratoire Sport et Environnement Social (SENS), 1741 rue de la Piscine 38400 Saint-Martin-d'Hères.

1. はじめに

2000年以降、日本全体でインバウンド・ツーリズム（以下、インバウンドと表記）が急速に発展し、スキーリゾートでも外国人の訪問が増加している。Vanat（2018）は、日本のスキーリゾートを訪問する全スキー客入り込み数のうち約10%程度が外国人スキーヤーの訪問であると報告し、観光白書によるとその経済効果は650億円程度とされる（国土交通省、2019）。バブル経済崩壊後、日本人によるスキー観光は停滞傾向にある中、外国人の訪問は日本のスキーリゾート再生の手段として重要視され、その動向の詳細な把握が求められている。

スキーリゾートへの外国人訪問増加の契機は2005年頃からの北海道ニセコ地域におけるオーストラリア人（以下、豪人と表記）の訪問増加である。ニセコ地域では、豪人による1週間程度の長期滞在が認められリゾート内での消費機会が多く、課題とされていた平日集客への貢献している。一方で、豪人の来訪増加とともに外国資本が流入し、多数のアパートメント建設による景観変化が生じた（呉羽、2017）。また、スキーリゾート内での利益は外国人に寡占される状況が生じた。その後2010年頃から豪人の訪問は、白馬、野沢温泉、妙高などの降雪に恵まれ、パウダースノーを楽しむ事ができる大規模スキー場を中心に伝播している。それらの地域では「外国人の長期滞在」、「宿泊施設経営などを中心に外国人がホスト化」する状況が報告されている（名倉ら、2017など）。

その一方で2010年頃から並行して、日本のスキーリゾートへのアジア人の訪問が増加している。彼らの観光行動は豪人のそれとは大きく異なることが予想されるが、その実態やスキーリゾートへの影響については未解明である。そこで本稿は、アジア人スキーヤー、とりわけ日本のスキーリゾートへの訪問の顕著な増加が認められる「中国、香港、台湾からの中国系ツーリスト」についての諸相を明らかにする。現在、欧米諸国においてスキー人口増加が収束傾向にある中、中国は近年急速にスキー観光が発展した希少な国である。中国政府は2022年の北京オリンピックに向けて、スキー関連人口を3億人に増やすとの方針を示し、今後ますますの拡大が見込まれている。また、2018年の全訪日外国人数3119.2万人のうち、中国が26.9%、香港が15.3%、台湾が7.1%を占め、3地域で全体の約半数に近く（日本政府観光局、2019）、日本のインバウンドにおける主要な出発地として重要視される。

2. 目的

研究背景を踏まえ、本研究では中国系スキーヤーの訪問に着目し、日本のスキーリゾートのインバウンド・ツーリズムの発展構造を明らかにする。

3. 方法

本研究では、中国系ツーリストの訪問が集中する新潟県湯沢町のインバウンドについて分析する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、湯沢町の地域概要およびインバウンドの概況を統計資料等により4.1で整理する。その後、2019年2月に行った中国系ツーリスト約100グループに対する聞き取り調査の結果をもとに、彼らのツーリズム行動を4.2にて分析する。そして、中国系スキーヤーの増加を受け、湯沢町のホストがどのように受け入れ体制を構築しているのかを4.3で述べる。その上で5にて、北海道などその他のスキーリゾートの状況も合わせ、日本のスキーリゾートのインバウンド発展の特徴について考察する。

4. 結果及び考察

4.1. 新潟県湯沢町の地域概要

湯沢町は、新潟県で東京に最も近いところに位置する（図1）。上越新幹線と関越自動車道という2種類の高速交通により人口が集積する首都圏からのアクセスに優れる。2019年の人口は約8100人で、町内に11か所のスキー場を有するスキー場集積地域として特徴づけられる。

湯沢町のスキー場開発について、呉羽（1995）が詳細にまとめている。湯沢町では第二次世界大戦前から上越線開通に伴いスキー場が立地した。その後、1960・70年代には、有利な交通条件に注目した都市部の大資本により大規模なスキー場開発がなされ、1994年には19か所のスキー場が立地した。1996年には年間スキー客数は800万人を上回った。しかし、全国的動向と同様、1990年代後半以降はスキー客数が急速に減少し、2010年頃にはピーク時の約4分の1になった。こうした減少の過程で、スキー場の閉業が複数みられ、現在では11のスキー場のみが営業し、年間スキー客数は250万人程度で維持されている。

次に、対面調査を実施した2か所のスキー場の特徴を述べる。まず、「ガーラ湯沢」は湯沢温泉街に近接し、1990年に上越新幹線越後湯沢駅に隣接する保線基地を拠点に開業した。新幹線改札口がスキーセンターに直結しており、ゴンドラリフト乗り場も同一の建物内にある。つまり、新幹線によるアクセスに優れ

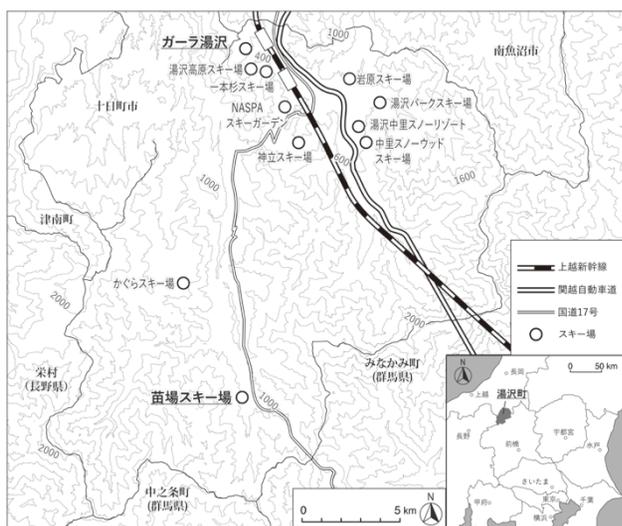


図1. 研究対象地域図

たコンビニエンス型のスキー場として性格づけられる。一方で、苗場スキー場は西武系列によって開発・運営され、スキーリゾート内の宿泊施設としては国内最大規模の苗場プリンスホテルをグレンデサイドに有する。リゾートホテルとスキー場が機能的に統一されており、リゾート型のスキー場として捉えられる。

湯沢町の冬季インバウンドは、ニセコ地域などと比べてやや遅れ、2010年頃から発展傾向がみられる。外国人宿泊数の推移(図2)をみると、特に2013年以降の増加が著しく、2017年には9万泊を超えた。なお、そのうちの約4万泊は苗場プリンスホテルでの宿泊である。外国人宿泊数の出発地に着目すると、台湾、香港、中国などが高い割合を占める。一方、日本のスキーリゾートで訪問が卓越する豪人は、湯沢町にほとんど来訪していない。

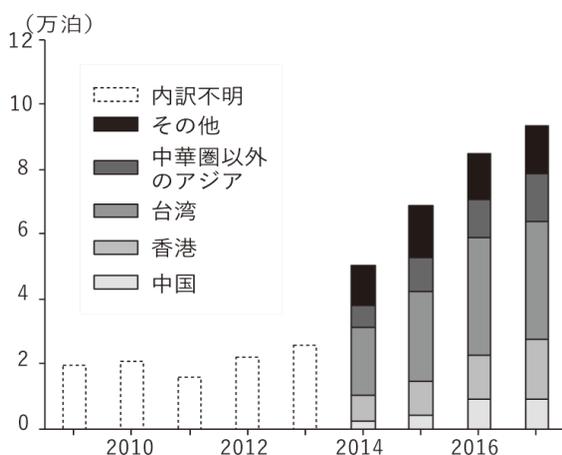


図2. 外国人宿泊数の推移 (2009-2017)

4.2. 中国系観光客の観光行動

湯沢町を訪問する中国系観光客の観光行動を分析するため、中国系観光客への対面調査を実施し

た。調査日時は、2019年2月8、9、10日(金、土、日)の3日間であり、14時から18時の間に、スキー場での活動を終えた中国系観光客を対象とした。調査場所は、「ガーラ湯沢」および「苗場スキー場」のスキー場最下部のセンターハウスであり、2か所で同時に調査を行った。調査者は筑波大学大学院に所属する中国人留学生3名および中国語が堪能な日本人1名であり、調査言語として中国語を用いた。質問項目は①グループ属性、②スキー経験、③湯沢町での滞在、④日本での観光行動であった。全回答者のデータから長期間で日本に居住する中国系観光客を除き、ガーラ湯沢で38グループ、苗場スキー場で49グループの計87グループのデータを得た。

4.2.1 湯沢町での滞在

グループ人数は、ガーラ湯沢で平均4.0人、苗場スキー場で平均5.9人と差異がみられ、2か所での平均は4.9人であった。グループの種類としては家族が卓越し、68グループが家族であり、そのうち8グループが複数家族による来訪であった。次に、彼らの出発地域をみると、ガーラ湯沢では中国が多く、苗場では台湾の観光客が多かった(図3)

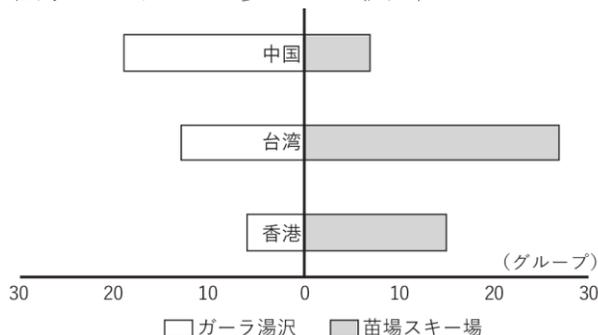


図3. 中国系観光客の出発地

湯沢町来訪の主目的を尋ねると、「スキー(81)、雪遊び(4)、雪を見るため(1)、温泉(1)」と、ほとんどの観光客が雪に関連した資源を求めている。湯沢町への再訪問者は14グループのみであり、大半は初めての来訪であった。旅行手配に関して、ツアー利用者はわずか2グループであり、これらも交通手段の手配を旅行会社に委託したのみであった。つまり、訪問者のほとんどがFIT (Free Independent Tourist) と呼ばれる個人旅行者であった。湯沢町の選定理由、つまり「日本内に多く存在するスキーリゾートから、なぜ湯沢町を選んだのか?」という質問に対しては、46グループがアクセスの良さに言及しており、これが湯沢町への来訪の主要因となっている。また、知人の口コミ(13)もある程度の重要性をもつ。

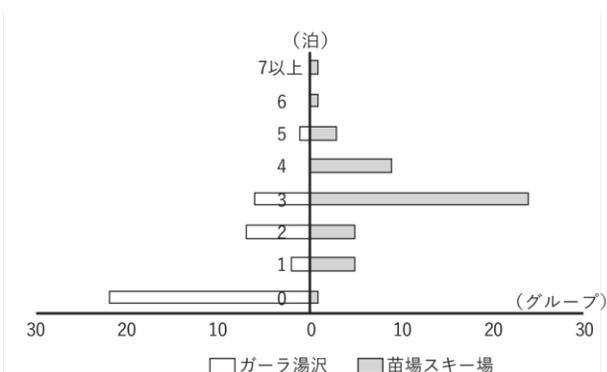


図4. 中国系観光客の湯沢町内での宿泊数

中国系観光客の湯沢町での宿泊には2か所で差異がみられた。ガウラ湯沢では平均1.0泊、苗場では3.2泊であった(図4)。湯沢町内でのスキー場以外の目的地については、74グループが「特になし」と答えた。「ある」の場合の目的地は、いちご狩り(3グループ)のほか、温泉(9)、ぽんしゅ館(2)訪問となっており、スキー場以外の目的地についてあまり関心を持っていなかった。湯沢町内での移動手段は、立地に基づき2か所で差異がみられた。ガウラ湯沢では、24グループが「なし」と回答し、彼らは新幹線で直接ガウラ湯沢駅に到着し、スキー場で過ごした後に東京方面に戻っている。そのほかガウラ湯沢では、バス(12)とタクシー(1)が利用されていた。一方、苗場スキー場では、越後湯沢駅から苗場への移動で45グループがバスを、残りは個人手配送迎車を利用していた。

4.2.2 スキー観光行動

まず、中国系観光客のこれまでのスキー経験について整理する。彼らのスキー技術レベルは2か所で異なり、ガウラ湯沢ではほとんど全員が初級者であり、苗場スキー場では約40%の中・上級者が存在した。また、生涯スキー経験日数を尋ねると、今回が初のスキー経験であったのは33グループであり、苗場を訪れた観光客の方がスキー経験が多かった(図5)。

次に、彼らの湯沢町内でのスキー観光行動について述べる。スキー場での活動として、80グループがスキ

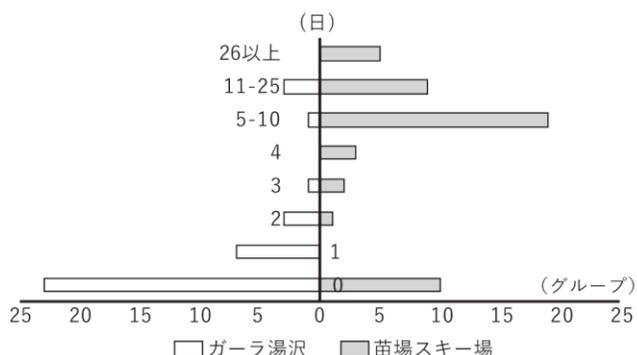


図5. 中国系観光客の全スキー経験日数

一かスキーボード、もしくはその両方を行うと回答した。また、残り7グループはガウラ湯沢で「雪遊びや雪見学」を目的としており、スキーをしない観光客であった。彼らのスキー日数は、購入したリフト券から把握できる。宿泊日数と同様に、苗場スキー場でスキー滑降日数が長く、ガウラ湯沢スキー場で短い(表4)。1日当たりのスキー場滞在時間は、ガウラ湯沢で平均5.8時間、苗場スキー場で5.3時間であり顕著な差異はなかった。また、今回の滞在で他のスキー場を来訪する予定があったのはわずか8グループであり、ほとんどは1つのスキー場に活動範囲がとどまっていた。

第3に、スキー場での消費行動についてまとめる。レンタルの利用は73グループに達している。ただし、その中には、スキーウェアや長靴のみをレンタル利用する、上述したようなスキーをしない観光客も含まれる(ガウラ湯沢)。また43グループと約半数がスキースクールを利用していた。昼食も82グループがスキー場内で行っていた。また、計7グループがスキー以外のアクティビティを行っており、その内訳は、雪遊び(4)、かんじきハイクとスノーシュー(各2)、スノーチュービングと展望台へのハイキング(各1)であった。

4.2.3 日本でのツーリズムにおける位置づけ

彼らのすべてが、成田空港か羽田空港のどちらかを利用していた。また、そのうちの4グループは、往路または復路のどちらかで関西国際空港か名古屋空港を利用しており、ゴールデンルートを移動している。湯沢町までの移動手段として、70グループが新幹線を利用しており、そのうち「ジャパンレールパス」の利用は51に達した。

表1. 湯沢町以外での宿泊数

宿泊数(泊)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10-14	15-
グループ数	12	8	18	18	7	7	3	1	5	3	3	2

続いて、彼らの日本国内での全宿泊数は、ガウラ湯沢に来訪した観光客で7.1泊、苗場では6.2泊であった。既述のように町内の平均宿泊数はそれぞれ1.0泊と3.2泊であるため、彼らの多くが日本滞在中に湯沢町以外での宿泊を組み合わせていた。また、湯沢町以外での宿泊数をみると、2-10泊程度湯沢町以外の場所に宿泊している(表1)。多かったのは東京であり、60グループがそこで2泊以上滞在していた。またその中には、「大阪(4泊)、京都(1泊)、湯沢(日帰り)、

東京(3泊)、「東京(1泊),湯沢(5泊),東京(2泊),日光(2泊)」のように国内主要目的地をめぐる事例がみられた。さらに、「白馬(5泊),東京(3泊),湯沢(日帰り),東京(3泊)」、「東京(2泊),湯沢(1泊),河口湖(1泊),山形蔵王(5泊)」など複数のスキーリゾートを訪問する特殊例も確認された。

今回の日本訪問の主目的は、苗場スキー場を訪れたツーリストでは47グループがスキーであった。それに対して、ガーラ湯沢でスキーと答えたのはわずか18にすぎない。スキーが主目的ではないツーリストは、東京や大阪での都市観光、またディズニーランドなど特定の目的地への訪問などを行き先としてあげた。

また彼らの旅行経験について尋ねると、外国旅行経験10回以上のツーリストが61グループに達し、さらに日本旅行経験が5回以上あるのは56グループとなっている。つまり、湯沢町は、外国旅行および日本旅行経験の豊富な中国系ツーリストによるインバウンド目的地であると位置づけられる。

4.3. ホストの受入体制の構築

中国系ツーリストの行動範囲は、ガーラ湯沢では「スキー場」、苗場スキー場では「スキー場とリゾートホテル」で完結していた。このように限定された施設において、外国人スキーヤーをどのように受け入れているのか、ガーラ湯沢、苗場スキー場および苗場プリンスホテルでの聞き取りに基づき、その特徴を整理する。

まず、両スキー場に共通する点として言語対応がある。スキー場内およびリゾートホテル内の多言語表記に積極的に取り組むとともに、インフォメーションセンターなどで外国人スタッフを雇用していた。

ガーラ湯沢では、アジア系の初心者スキーヤーへの対応が充実している。初心者専用練習ゲレンデを計3か所設置し、リフト搭乗可能以前の技術レベルにある初心者スキーヤーの練習場所を確保している。レッスン内容も日本人へのスキー指導とは異なり、雪に慣れていないアジア系スキーヤーが安全にスキー体験をできることを重視しているという。さらにガーラ湯沢では、スキーをしないツーリストに向けたスノーアクティビティの拡充が認められる。初心者練習ゲレンデとは別に、雪遊びやソリができる「雪遊びパーク」を設置し、2018年には新たに屋根付きのスノーエスカレーターを新規設置した。また、スノーモービルでキャビンを引っ張る「雪景色遊覧ツアー」、スノーシューやかんじきを履いて散策を楽しむ「スノーシューツアー」と「かんじきハイク体験」などが、アジア出身ツーリスト向けに実施される。また、ゲレンデ上部には「愛

の鐘展望台」を設置し、ゲレンデ上部からの景色を楽しむようにしている。こうしたスノーアクティビティに対応し、スキーレンタルでも「長靴とソリ」をセットで貸し出すサービスもなされている。

一方の苗場スキー場では、スキー場内ではコース案内表記の多言語化、スキー場内での外国語レッスンには取り組んでいる。しかし、アジア系の初心者スキーヤーやスキーをしないツーリストに向けたサービスの拡充は少ない。スキー場への聞き取りによると、そもそもスキー場自体が中・上級者向けの設計であり、インバウンドにおいてもある程度のスキー技術を有する人々を主要なターゲットにしているという。また、苗場スキー場運営するプリンスホテルグループでは、このほかにも「志賀高原焼額山スキー場」、「富良野スキー場」、「軽井沢プリンスホテルスキー場」などを運営している。そこでは程度の差はあるものの、外国人スキーヤーを誘引している。そうした中で、苗場スキー場および苗場プリンスホテルが単独で誘客戦略に取り組むことは少なく、プリンスホテルグループ内のインバウンド事業担当部門を中心に、プロモーションに取り組んでいるという。具体的には、台湾ではスキー展示会への参加、旅行会社へのセールス強化を実施する。また、中国の吉林省で松花湖プリンスホテルと松花湖スキー場を2015年から営業し、中国スキー業界でブランドイメージを確立することで、日本のスキー場への誘客を狙っている。さらに、プリンスホテルグループは全国で計50弱の系列ホテルを有しており、グループ全体でインバウンドが重要視され、ホテル内での外国人への対応指針が共有されている。

このように、ガーラ湯沢と苗場スキー場のインバウンド受け入れ体制では、系列グループ企業の資源を利用した取り組みが認められる。つまり、都市資本によって多くのスキー場運営が継続されてきた湯沢町の特徴が反映されている。また、湯沢町の受け入れ体制に関するその他の取り組みとして、湯沢町観光協会によるプロモーションがある。湯沢町観光協会は2009年に「インバウンド招致委員会」を設置し、外国を訪問してのプロモーション活動や、海外旅行代理店・メディアの招致などを行ってきた。ここで注目すべき点は、誘客対象とした地域である。第一期計画(2009-12年)の誘客地域は「台湾、香港、中国を中心とした東アジア」とし、中国系ツーリストの誘客に取り組んだ。その後の第二期計画(2013年)では、第一期の地域に加えて「タイ・インドネシアなど」へ誘客地域を拡大している。湯沢町観光協会への聞き取りによると、インバウンド推進を開始した当初から、スキー場の雪質が

他の地域に比べて劣ること、東京から湯沢町へのアクセスの良さなどを考慮し、日本で当時に主流であった豪人ではなくアジア人中心の誘客を目指したという。これらの誘客地域は現在の湯沢町におけるインバウンドの主要な出発地域となっており、湯沢町観光協会のプロモーション方針の妥当性が今日のインバウンドの発展に影響したと思われる。

5. まとめ

本稿では、新潟県湯沢町のスキー場における中国系観光客への対面調査に基づき、日本のスキーリゾートの発展構造を検討した。

湯沢町における彼らの観光行動は2か所のスキー場で異なっていた。すなわち、ガーラ湯沢では優れたアクセスに基づく日帰り訪問が卓越し、初級者によるスキーやスノーアクティビティが充実しており、「短時間体験型」のインバウンド・スキー観光が形成されていた。一方、苗場では観光客の観光行動はスキー場とホテル内で完結する3泊程度の滞在が卓越し、「中期滞在型」のインバウンド・スキー観光が形成されていた。受け入れ体制の構築についても、2か所のスキー場で観光客の観光行動に合わせた差異がみられる。ガーラ湯沢は初心者スキーや雪体験のサービスが充実しているが、苗場スキー場はある程度スキーができる観光客を集客していた。一方、スキー場運営主体が系列グループの優位性を生かしたインバウンド対策を行っていることが共通点として指摘できる。また、湯沢町観光協会によるインバウンド誘客方針が、湯沢町のアジア中心のインバウンド発展に寄与した。

同様に北海道に位置するトマムスキー場、富良野スキー場、キロロスノーワールドを有する自治体では(2017年12月-翌年3月)、外国人による全宿泊数の40%以上を中国系観光客が占めている。これらはリゾート型のスキー場であり、本研究で解明した、苗場スキー場のような「中期滞在型」のインバウンド・スキー観光形態がみられる。また、札幌国際スキー場やテイネススキー場への聞き取り調査によると、札幌市中心部からのアクセスの良さを生かし、ガーラ湯沢のような「短時間体験型」のスキー観光が重視されている。このように、本研究で明らかになった湯沢町における2つのタイプのインバウンド・スキー観光が、北海道でも認められる。加えて、すでに多くの先行研究が諸相を捉えてきた豪人による1週間程度の滞在が定着したニセコ地域、白馬、野沢温泉などスキーリゾートでは、「長期滞在型」のインバウンド・スキー観光が形成されている。そこでは、新たな宿泊施設としての

アパートメントの登場や、フランスなどのヨーロッパアルプスに由来するアプレスキー文化が持ち込まれている。加えて、パウダースノーでのスキーを志向するオフピステスキー、スキー場外でのバックカントリースキーが盛んになるなど、スキー活動自体の変化も認められる。つまり、現在の日本のスキーリゾートにおける外国人の滞在形態は、「短時間体験型」「中期滞在型」「長期滞在型」の3つに類型できると考えられる。

フランスをはじめとするヨーロッパの主要スキーリゾートでは、リゾートの発展当初から外国人の訪問が想定されてきた。例えば、シャモニーでは18世紀のイギリス人の訪問がリゾート発展の契機として位置づく。また、フランスの高級スキーリゾートとして位置づくクールシュベルは、そのリゾートタウンの高級化からフランス人の訪問懸念が生じ、現在ではその半数以上をイギリス、ロシアを主とする海外市場に依存している。それに対して、日本のスキーリゾートでは後発的に外国人を受け入れる点が特徴だろう。今後、こうしたリゾート発展における外国人受け入れのタイミングの差異が、リゾートの長期的な持続的発展にどう影響を及ぼすのかの検討が必要であろう。

【参考文献】

- 国土交通省 (2019) 観光白書 -令和元年版,
<http://www.mlit.go.jp/statistics/file000008.html>(Cited 2019/12/01).
- 呉羽正昭 (2017) スキーリゾートの発展プロセス -日本とオーストリアの比較研究, 二宮書店.
- 呉羽正昭 (1995) 新潟県湯沢町におけるスキー場開発の進展. 愛媛大学法文学部論集, 29 : 131-155.
- 名倉一希, 甲斐宗一郎, 小泉茜彩子, 王汝慈, 呉羽正昭 (2017) 野沢温泉村におけるスキー観光の変容 -インバウンドツーリズムの展開に着目して. 地域研究年報, 39 : 65-89.
- 日本政府観光局 (2019) 訪日外客統計の集計・発表.
http://www.mlit.go.jp/kankochu/siryou/toukei/in_out.html(Cited 2019/12/01).
- Vanat, L. (2018) International Report on Snow & Mountain Tourism 2017 Overview of the key industry figures for ski resorts,
<https://vanat.ch/RM-world-report-2018.pdf> (Cited 2019/12/01).

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

